巻頭の辞

Ｉ・Ｆ・ポポワ
佐藤裕子　訳

今回の梵文法華経の出版は、誇張なしで100年以上におよぶ数世代の収集家、研究者、管理担当者、修復専門家の献身的な営為と努力のたまものであります。本出版に収められた法華経写本は、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所（IOM RAS）に所蔵されてきたもので、東洋諸民族の写本と典籍を収めた世界最大、かつロシアにおける最も価値あるコレクションの中の「至宝」であります。当研究所の写本コレクションには、65の現存する東洋言語と死語となった東洋言語で書かれた11万5千点以上の所蔵品が保存されています。

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所は、1818年にアジア博物館として創設されました。1818年11月23（11）日、サンクトペテルブルクの帝国科学アカデミー総裁セルゲイ・セミョーノヴィチ・ウヴァーロフ（1786–1855）が、「アカデミー付属クンストカメラ博物館（ピョートル大帝名称人類学・民族学博物館）に、東洋のメダル・コイン類、写本、および書籍のための特別部署を設立する必要性」[1]に関する書簡をアカデミー理事会へ提出しました。この要請は、主として「古代の文物」、過去の史跡の研究に向けられていた、当時の人文学の課題に合致していました。

アジア博物館の初代館長となったのは、卓越した東洋学研究者であり、歴史家、古銭古碑研究家のフリスティアン・ダニーロヴィチ・フレーン（1782–1851）です。ロシアの東洋学者・歴史家であるＩ・Ｙ・クラチコフスキー（1883–1951）とＶ・Ｖ・バルトリド（1869–1930）によれば、フレーン館長の尽力により、アジア博物館は、他のヨーロッパの東洋学センターであれば少なくとも200年はかかるところを、比較的短期間の、わずか20年間でそのレベルに到達することができたのです。アジア博物館創立のきっかけの一つが、アレッポのフランス

領事で、偉大な哲学者ルソーの親戚であった、ジャン＝バティスト＝ルイ＝ジャック・ルソー（1780–1831）から、1819年と1825年（2回受領）に700点以上のアラビア文字の類いまれなイスラム関係写本を購入したことでした。この新たな収集品の研究は、ほどなくサンクトペテルブルクにおけるアラブ研究の進展を促すことになりました。そして、それ以降にアジア博物館が入手した多くの収集品のすべてが、ロシアにおける東洋学の専門分野の発展に直接的影響を及ぼしたのです。1836年と1838年にアジア博物館がP・L・シリング・フォン・カンシュタット（1786–1837）のコレクションから購入した収蔵品は、チベット学、モンゴル学、仏教学の発展に寄与しました。19世紀半ばに行われたM・I・ブロッセ（1802–1880）による収集活動は、グルジア学、アルメニア学などの分野で新たな突破口を開き、世界で最も充実したカフカス学の研究部門と、他に類の無いグルジア文庫の設立につながりました。

当時のロシア政府と科学アカデミーは、アジア博物館を東洋の文化と伝統を研究するための、すべての資料を集結・調整する責務を担う主要センターであると考えました。19世紀半ばになると、アジア博物館は、東洋写本の保管と研究のための唯一の国家機関となり、写本の安全な管理を保証し、実務および学術目的での写本の利用の便宜を図っていました。写本を利用することができたのは、サンクトペテルブルクの東洋学にかかわる学者や実務家だけではありませんでした。当時の手続きにのっとり、学術研究のためロシア国内、さらには国外へも写本が送付されました。その設立当初から、アジア博物館は研究と管理を行うだけでなく、その所蔵品を一般に公開するという教育機関としての役割も果たしていたのです。希望者は「特別な手続きなしで」アジア博物館に展示されている珍品を見学することができ、東洋学者たちは研究目的で写本を利用することができました。

アジア博物館の収蔵品が飛躍的に充実・拡大した一時期がありましたが、それは19世紀末から20世紀初頭にかけて行われた中央アジアへの探検と深く関係しています。これらの探検によって収集された資料のおかげで、ロシアでは、敦煌学、タングート（西夏）学、ウイグル学、チュルク・ルーン（突厥）文字の碑文学といった、独特の研究分野が発展を始めたのです。1845年創立のロシア地理学協会が、ウスリー川流域地方、モンゴル、中国への第1回合同探検隊を組織しました。探検隊に参加したN・M・プルジェヴァリスキー（1839–1888),

M・V・ペフツォフ（1843–1902），G・N・ポターニン（1835–1920），V・I・ロボロフスキー（1856–1910）は、古代遺跡を調査し、考古学的発掘を行い、住民から古い写本や生活用品を購入しました。

ロシアにおける東洋写本の集積に顕著な貢献をしたのが、外交官たちです。1844 年、ロシア政府はアジアで勤務するすべての領事に、東洋言語で書かれた写本を購入する任務を与えました。この体制は、第 1 次世界大戦の始まる 1914 年まで厳格に守られました。1863 年、大量の所蔵品が外務省のアジア局からアジア博物館に譲渡されました。19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、極東および中央アジアで勤務するロシアの外交官たちから、さまざまな言語で書かれた膨大な数の写本や書籍がアジア博物館のコレクションに収められました。

中央アジアの古代研究において卓越した役割を果たしたのが、外交官で東洋学者のニコライ・フョードロヴィチ・ペトロフスキー（1837–1908）です。初めに彼は軍事職を選択し、モスクワの第二陸軍幼年学校で学んだ後、1859 年から 1861 年までアレクサンドル孤児陸軍幼年学校で教鞭をとりました。1870 年、N・F・ペトロフスキーは、トルキスタン知事勅任文官職で財務省事務官に任命され、通商と産業情勢に関する情報収集のためタシケントへ派遣されました。

タシケントでペトロフスキーはこの地域の歴史について研究を始め、地域研究に積極的に取り組みました。中央アジア学術者団体の自然科学、人類学、民俗学愛好家協会のトルキスタン支部とトルキスタン考古学愛好家クラブの創設に参加しています。1872 年にペトロフスキーは、ブハラ、インド、アフガニスタンへ旅行、1878 年の 10 月から 12 月にかけては、南カフカス地方、ペルシア、および（ロシアが）獲得したトルコに近い地域におけるロシアの通商の状況について調査するため、チフリス、バトゥム、ポチ、カルスに滞在しました[2)]。1882 年 6 月 1 日、ペトロフスキーに、駐カシュガル領事着任の辞令が発せられました。1903 年 8 月、ペトロフスキーは任務を終え、タシケントに居を構え、そこで 1908 年 11 月 19 日に亡くなりました。

ペトロフスキーは、東トルキスタンにおけるロシアの活動拡大に貢献しただけでなく、この地域に関する学術的考古学研究の発展にも尽くしたのです。ペトロフスキーの評伝を書いた人たちによれば、彼は「第一級の東トルキスタン通という栄誉を得た。フランス語、ドイツ語、英語、トルコ語の書籍を収めた一流の蔵書から得た彼の該博な知識は、ロシア全般について、そして特に中央

アジア地域についての多数の文献を自由に読みこなす助けとなった」のです[3)]。

ペトロフスキーと帝国ロシア考古学協会東洋支部の長年にわたる協力は、1890年3月15日の同協会東洋支部会議にペトロフスキーが参加した時から始まりました。席上、彼は中央アジアで入手した、いくつかの古代貨幣を公表しています[4)]。1891年11月28日、セルゲイ・フョードロヴィチ・オルデンブルク（1863–1934）の助言により、同協会東洋支部は、クチャおよびカシュガリア（新疆のこと）の他の地域にある古代遺跡の存在についてペトロフスキーに情報を提供して欲しいと話をもちかけました。この問い合わせに対して、ペトロフスキーは詳細な返信をしたため、２年前に自身が入手した写本１点とともに送りました。これこそが、今回出版される有名な「Ｎ・Ｆ・ペトロフスキーのカシュガル写本」です。この写本が初めて学術界に紹介されたのは、1892年Ｓ・Ｆ・オルデンブルクによってでした[5)]。

「カシュガル写本」ともよばれるこの写本は、アジア博物館の中央インド（中央アジア）書庫の最初の収蔵品となりました。ここには現在、ウイグル語、トハラ語、サカ語、ソグド語等の言語で書かれた7,000点以上の収蔵品があり、世界的に最も価値あるコレクションの一つとなっています。1892年から1893年にかけて、ペトロフスキーはオルデンブルクに、クチャ、コルラ、アクスの地元民から入手した100点以上の写本の葉や断簡を送付しました。1905年、ペトロフスキーは自身が東トルキスタンで収集したすべての写本コレクションを、1903年に創立された中央・東アジア研究のためのロシア委員会に寄贈しました。その後、東トルキスタン（新疆）駐在の他の領事であった、Ｎ・Ｎ・クロトコフ、Ａ・Ａ・ディヤコフ、Ｓ・Ａ・コロコロフも、この委員会に対して彼らが購入した写本を定期的に送付することを開始しました。中央アジアにおいてロシアの学者たちが行った研究活動は、世界の東洋学の主流をなした傾向と軌を一にしていました。19世紀の終わりから20世紀初頭にかけて、世界の東洋学において最優先課題となり、最大に注目されていたのが、まさにこの地域だったからです。ロシアだけでなく、ドイツ、イギリス、日本の外交官、探検家、研究者たちが行った中央アジアでの発見のおかげで、消滅し忘れ去られていた言語（ホータン＝サカ語、トハラ語ＡとＢ）が再び見いだされ、東洋学の分野での新たな潮流をつくり出しました。

ロシアに送られた写本の大部分を受け入れたアジア博物館の課題となったの

が、それら写本の目録作成、カタログ化、研究、および他の学術目的での利用でした。中央アジアからもたらされた貴重な写本の一部は、Ｖ・Ｖ・ラドロフ（1837–1918），Ｋ・Ｇ・ザレマン（1849–1916），Ｓ・Ｆ・オルデンブルク、Ｆ・Ａ・ローゼンベルク（1867–1934），Ａ・Ｉ・イワノフ（1878–1937），Ｓ・Ｅ・マーロフ（1880–1957），Ｎ・Ａ・ネフスキー（1892–1937）らの努力によって、1910年代にすでに出版されています。

1930年、アジア博物館は改組され、ソ連科学アカデミー東洋学研究所として活動することになりました。この時から東洋の古文書の研究とともに、新たな研究所のスタッフは、アジアの歴史における時事的な問題について研究することを要請され、また、アジア諸語、とりわけソ連邦内のアジア系共和国の言語を学習するための辞書と文法書の編纂も依頼されました。1950年、ソビエト連邦閣僚会議と科学アカデミー幹部会は、東洋学研究所をモスクワへ移転する決議を採択しました。レニングラードには東洋写本の部門が残されました。1956年に東洋学研究所レニングラード支部に改組され、1991年、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部となりました。2007年に同研究所サンクトペテルブルク支部は、さらに改組され、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所となりました。

1950年代に中央インド書庫の目録作成と研究活動を続けたのが、ウラジーミル・スヴャトスラヴォヴィチ・ヴォロビヨフ＝デシャトフスキー（1927–1956）でした。彼は、すべての断簡について古文書学的解説を含む予備目録を作成しました。彼が（サンクトペテルブルク・コレクションの資料をもとに）中央アジア文献学の諸問題について包括的に記述する事業を創始したのです。残念ながら、このプロジェクトの一部を完成させただけで、彼は突然亡くなってしまいました[6)]。

このあと、Ｍ・Ｉ・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤが、東洋学研究所所蔵のインド諸語の断簡についての研究事業を引き継ぎました。まず彼女の努力と、また、Ｇ・Ｍ・ボンガルド＝レヴィン（1931–2009）とＥ・Ｎ・チョムキンの貢献により、1990年と2004年にサンクトペテルブルク・コレクションの「ペトロフスキーのカシュガル写本」の内容は、『中央アジアのインド語文献の記念碑』の第２巻および第３巻として、写真版が、ローマ字テキストと解説付きで出版されました[7)]。

今回の出版は、中央アジア写本のテキスト研究の分野における先進的専門家たちによって準備され、19世紀末に新疆で発見された梵文法華経写本を、初のカラー写真版として公刊するものです。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵のこの写本は、世界の他の機関が所蔵されている写本の葉と断簡により、その欠落部分を補うことができます。それによってはじめて、この写本出版が中央アジアと極東の広大な地域における仏教史の研究のための極めて貴重で完全な研究史料になると思います。

注

1） ロシア科学アカデミー古文書館サンクトペテルブルク支部、F 4、目録2(1818), 単位52, 12−13葉。

2） V・G・ブヘルト「そして彼のロシアの肖像」、N・F・ペトロフスキー「トルキスタンからの手紙」、V・S・ミャスニコフ監修、モスクワ、『歴史思想の記念碑』、2010年、23頁。

3） ニコライ・フョードロヴィチ・ペトロフスキー『ウズベキスタンにおける社会科学の歴史編纂学』、B・V・ルーニン編、タシケント、ウズベキスタン・ソビエト社会主義共和国「科学アカデミー支部」出版、1974年、278頁。

4） 帝国ロシア考古学協会東洋支部記録、サンクトペテルブルク、1891年、V巻、I号、II－III頁、V・G・ブヘルト「そして彼のロシアの肖像」、31頁。

5） S・F・オルデンブルク「N・F・ペトロフスキーのカシュガル写本」、『帝国ロシア考古学協会東洋支部記録』、VII巻（1892), 1893年、81−82頁。

6） 『中央アジアのインド語文献の記念碑』、1号、テキスト出版、研究および注釈 G・M・ボンガルド＝レヴィンとM・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤ、モスクワ、『東洋文献』、1985年、11頁（『東洋文献の記念碑』、LXXIII, 1; Bibliotheca Buddhica, XXXIII）.

7） 『中央アジアのインド語文献の記念碑』、2号、テキスト出版、研究および注釈 G・M・ボンガルド＝レヴィンとM・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤ、モスクワ、『東洋文献』、1990年、（『東洋文献の記念碑』、LXXIII, 1; Bibliotheca Buddhica, XXXIV），『中央アジアのインド語文献の記念碑』、3号、テキスト出版、研究および注釈　G・M・ボンガルド＝レヴィン、M・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤとE・N・チョムキン、モスクワ、『東洋文献』、2004年、（『東洋文献の記念碑』、LXXIII, 3; Bibliotheca Buddhica, XL）.

（I. F. Popova ／ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所長）
（訳・さとう　ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員）